

初期女舞の図像伝統に関する研究 — 先行研究史と目録化 —

日本大学 安室可奈子・丸茂 祐佳

1. はじめに

1603（慶長8）年に出雲お国が京都で踊った「かぶき踊」は、その後、遊女や女芸人を中心に多くの追随者を生み出し、女歌舞伎・遊女歌舞伎は幕府によって禁止される1629（寛永6）年ごろまで続いた。以降、歌舞伎の伝統は男性役者によって引き継がれていくが、一方で女性芸能者も舞踊の分野で活躍する道を選び、その文化の一端を今日まで伝承してきたと考える。

こうした芸能史の流れの中で、本研究では、桃山から江戸初期にかけて、屏風・草子等に描かれた近世初期風俗画のうち、特に女性芸能者による舞踊図像を取り上げ、その先行研究史と目録化を報告する。なお本研究では、女性芸能者の舞踊を総称して「女舞」と仮称する。

2. 研究目的

2.1 先行研究史について

20世紀初めより、歌舞伎絵はその芸態を解明する手段として用いられ始めた。坪内逍遙は絵画を歌舞伎研究の画証として初めて位置づけ、吉田暎二はその視点を継承して個別作品をさらに考察した。守随憲治・秋葉芳美は『歌舞伎圖説』（1931年）において作品群を網羅的に目録化し、後々の研究発展への道を開いた。

こうした画証的見地からの歌舞伎史研究についての諸先覚の業績は、すでに諏訪春雄氏によって、『歌舞伎史の画証的研究』（1974年）において簡潔にまとめられている。また諏訪氏は、これに先駆け『歌舞伎開花』（1970年）において、未発表の歌舞伎絵を含む多くの女舞図像を色刷図版で紹介し、守随以後の目録をさらに充実させた。

一方、1970年代後半より80年代にかけて、美術史の立場から榎崎宗重、小林忠、河野元昭、奥平俊六氏らが歌舞伎絵の研究に参画し、その図像の系譜と各作品の関連づけを中心に研究を進め、美術全集における作品目録や個別作品に関する研究を深めた。

また、服部幸雄氏は演劇史研究の立場から画証資料を扱う上での問題点を論じ、故守屋毅氏は作品をより広い意味での文化史と関連づけて論じた。

我々は先学諸氏の学恩を拠り所としつつ、初期女舞図像の作品群の分析・評価についてさらに詳しく述べてみたい。

2.2 目録化について

女舞の中でも、歌舞伎舞台を表現した図像は歴

史学の諸ジャンルにおいて多角的に検討され、深化されてきた。とりわけ「芸能史」と「美術史」の二つの専門分野による研究は、絶妙な相互補完関係を保ちつつ発展してきたと言えるだろう。

近頃、宮島新一氏の『風俗画の近世』（2004年）や最新刊『日本の美術』（No.482・483・484）において、これらの図像が豊富な図版資料とともにまとめられ、研究状況を急進展させている。しかしながら、それらは異なった画題に描かれた歌舞伎・舞踊図を概観し、画面の細部に踏み込んだ図像分析を行いつつも、演劇・舞踊学的な視座からの検証にはまだ着手されていないというのが現状かと思われる。

以上の成果を補綴しつつ、我々は、初期女舞図像を整理・分類し、あらためて目録を作成し、その系譜と特徴について比較検討している。結果、それらを新しい視点で類型化し、構図として関連づけることを試みてみたい。

3. 考察と結果

以上のように、歴史研究の多様な視点が交差する中で女舞図像の先行研究史を振り返りつつ概観すると、いくつかの報告事項が出てきた。

一例として、「茶屋遊び」の主演である「かぶき者」と「茶屋のおかか」の二人に注目し人物表現に着目して分析した結果、様々に類型化されることがわかった。

このことが、直ちに作者や作品の成立年代等の解明につながるものではないが、今後、「慶長から寛文」と大きく括られた初期女舞の作例群の図像的着想源を、美術史的にいま一度再考する際の小さな手掛かりにはなり得るであろう。

4. 今後の課題

今後は、衣裳（文様も含む）・髪型・持物（小道具）等、より多様な視点に立って同様の図像伝統に関連づけられる作例を整理する必要があるだろう。

そして、情報技術を利用した教育や研究に寄与できる環境を整備することを課題とし、様々なアプローチから検索可能なデータベースを構築する。そこから主として女舞の身振りを基準に類型化し、初期歌舞伎の芸態との関わりについてさらに考察を重ね、日本舞踊の源流としての舞踊研究へと踏み込む一歩にしたい。

付記：本研究は、文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業日本大学芸術学部プロジェクト「日本舞踊の教育システムの文理融合型基盤研究並びにアジアの伝統舞踊との比較研究」によって行われた。